

『松江市史』から読み解く「大橋川」と「大橋」の名称由来（3）

－推論「大橋」の名称起源と斐伊川東流について－

『松江市史』を読み解く限り、松江大橋の下を流れる大橋川は、明治14年（1881）に作成された「皇国地誌（郡村誌）」で初めて見られるようになった名称である（別稿：「大橋川」の名称由来編参照）。今日、初代大橋は堀尾吉晴によって架けられたと説明され、現在の松江大橋は第17代目の大橋と数えられる。「大橋」の名称は江戸時代の史料にもしばしばみられることから、大橋川の名称由来は、大正3年（1914）に新大橋が架けられるまでは松江の南北を結ぶ唯一の橋であり、松江名所にもなっていた「大橋」から川の名となったことは明らかである。ここでは、松江市民が愛してやまない「大橋」の名称起源を、推論を交えて探ってみよう。

『松江市史』には松江市域に関わる古代、中世の文献史料がほぼ網羅的に収録されており、白潟と末次をつなぐ橋として、「白潟橋」の名称が中世文献史料に記されている。しかし、「大橋」という名称は見あたらない。では、白潟と末次をつなぐ橋は、いつから、なぜ「大橋」という名称になったのだろうか。

藩主松平宣維（松江松平家5代）の再命により、享保2年（1717）に完成した「雲陽誌」には、「大橋」について次のように記されている。

（島根郡 松江城府）

湖上の上島根意宇両郡の境に橋あり是を大橋とといへり雲州第一の長橋なり橋より西へ湖水七里はかり東は馬潟まで二里あまりなり

18世紀初頭には、公式の橋名として「大橋」が記録に残り、「雲州第一の長橋」であったことが分かる。（「雲陽誌」は隠居した綱近（前藩主）の命により宝永2年（1705）から編纂が始まったが、綱近が同6年に没したために一時中断した。しかし、宝永2年時点で国中の古書跡は既に収集されていた。）

また、藩行政に携わる者が参照すべき便覧とも呼べる書として、明和4年（1767）から天明2年（1782）に成立した「雲陽大数録」には、「大橋」について次のように記されている。

大橋 長七拾間、幅貳間貳尺六寸

寛永十三丙子年京極氏懸直し、是より前一度懸直し有之由申伝

万治三庚子年懸直し 元明ト云

式拾五年目

延宝二甲寅年洪水中切繕

貞享二乙丑年懸直し 玉太ト云
式拾六年目
宝永六己丑年懸直し 蓮台ト云 又珠共云
式拾五年目
元文三戊午年懸直し 要津と云
三拾年目此時五間縮る
宝暦三癸酉年懸直し 文津と云
拾六年目 九月二十三日渡始（史料編「近世Ⅰ」）

「寛永十三丙子年京極氏懸直し、是より前一度懸直し有之由申伝」とあるように、元明大橋（万治3年〔1660〕）より前の「大橋」架橋が記されている。今日でも、大橋の代数を数える場合、京極氏が架けた「大橋」（寛永13年〔1636〕）の前代を初代としており、堀尾氏が城下町形成時に架けたとされる「大橋」（「依之早速大橋掛り申候由、」「松江亀田山千鳥城取立之古説」（島根県立図書館））が思い当たる。

同じ「雲陽大数録」には、

一、末次より白瀉の渡り、古老云、尼子氏の時簸の川西へ流るか故に渡り場浅く瀬戸有り、常に竹橋を懸る、是をからゝ橋と云、亀井からゝ橋を打渡りしと軍岩記にあるも此所なりと云、水僅にして湖水ハ池のことく、洒水の時ハ一面に流るゝと云なり、大橋の柳古へ渡り場の縄を付たりと云、然れハ古への往来も今の大橋の所にや、其後大河東へ折て、夫より急流にして甚深し、南土手堪かたく蛇籠を以て防ぐ故、其所を今に籠か鼻と云（史料編「近世Ⅰ」）

とも記されている。この古老の伝えが正しければ、“尼子氏の時”には白瀉と末次の間は斐伊川が西流していたために、“渡り場浅く瀬戸有り、常に竹橋を懸る”状態であった。そして、「其後大河東へ折て、夫より急流にして甚深し、南土手堪かたく」とあるように、斐伊川の東流以降、“渡り場”や“竹橋”が架っていた辺りは急流になり、水深も深くなり、それまでであった“南土手”では耐え難くなったことを伝えている。

ところで、松江には最初の大橋の普請（建設）は難渋を極めたため、偶然通りかかった源助を人柱に立てたという有名な伝説が伝わっている。小泉八雲は、著書の中で次のように伝えている。

慶長時代に出雲の大名となった堀尾吉晴が、始めてこの河口へ橋を架けようとした時、大工が幾ら骨折っても駄目であった。柱を支える堅固な河底が無いやうであった。沢山巨石を

投げ込んで見たが、何の甲斐も無かった。昼間の作業は夜の間に流されたり、丸呑みにのみこまれたからである。しかし畢竟、橋は架った。が、直ぐに柱が沈み出した。それから洪水のために半数も柱が流された。修復すれば、また壊はれる。そこで人身御供して、水神の怒りを宥めることとなった。水流の最も意地悪い、中央の柱の根本へ、一人の男を生きながらに埋めた。それから橋は三百年間びくとも動かなかった。

犠牲になった男は、雑賀町に住んでいた源助といふ者であった。それはまち（襠）のない袴を着けて橋を渡る者があれば、それを埋めることに決めてあった。すると、まちのない袴を穿いていた源助が、渡らうとしたので、犠牲になった。その訳で、最中央の橋柱は源助柱と名が附いていた。（ラフカディオ・ハーン、落合貞三郎他訳『小泉八雲全集』第三卷、第一書房 1926）

もちろん、伝説を史実と混同することはできない。しかし、中世の文献史料によれば、島根半島側と南側を結ぶ「白濁橋」の辺りはしばしば合戦の舞台となっており、当時の白濁と末次の間はまさに「尼子氏の時籾の川西へ流るか故に渡り場浅く瀬戸有り、常に竹橋を懸る」（雲陽大数録）と記されたような景観だったのではなかろうか。このような中世白濁・末次の景観を変えた出来事が斐伊川の東流であり、以後、白濁と末次をつなぐ橋には堀尾氏（松江藩）が直接普請に関わるような「雲州第一の長橋（雲陽誌）」である「大橋」を必要とし、普請には多くの困難や犠牲者があったことを「源助伝説」は伝えたのかもしれない。

もう一つ興味深い伝承がある。史料編纂課の主任編纂官内田文恵氏の祖母の実家は“大橋”姓をもつ家だという。この大橋家は代々大工を家業とし、“大橋”姓を名乗るにあたっての家名伝承があったという。それによれば、「先祖は堀尾さんについて広瀬から移住し、白濁と末次の間をつなぐ橋の普請を堀尾さんに命じられた。苦難の末、橋の普請を成功させた功により、橋の名にちなんで“大橋”の名を与えられ、以後、大工町（現松江市灘町）に住み大工の頭分として多くの弟子を抱えた。屋敷を構え、天満宮までは自分の土地のみを通って行けた。」というものである。明治時代初期に作成された沽券台帳には、確かに大工町に「大橋重助」の敷地が載っている。残念ながら、大橋家の家名は現在絶えており、堀尾氏に命じられて橋を普請し、橋名にちなんで“大橋”姓を与えられたという家名伝承を示す史料は伝わっていないという。しかし、この家名伝承は、「源助伝説」と同様、白濁と末次の間で堀尾氏（松江藩）が直接関わるような大きな橋（大橋）の普請が行われたこと、功労として橋名である“大橋”の姓が与えられるほどの普請の困難さを伝えたものとも推測できる。

なお、斐伊川が東に流れて以降、宍道湖から中海に向けての流量はどれだけ増えたのだろうか。斐伊川流域図（斐伊川水系流域界）を見る限り、斐伊川東流により、ほぼ現在の雲南市域と奥出雲町域に相当する範囲の河川（斐伊川上・中流域）から水が流れ込むこととなる。も



ちろん地表にとどまる水はあるものの、斐伊川西流時に宍道湖に流れ込んでいた水系流域面積に比べ、斐伊川東流後には斐伊川上・中流域が加わり約 3 倍の水系流域面積に拡大することが分かる。面積的な比較を基に、現在の大橋付近の水量は概ね 3 倍近くになったと考えられるのである（現在の宍道湖水の約 70%は斐伊川起源）。

さて、「雲陽大数録」に記されたような中世白潟・末次間の景観を変えるような大きな出来事が近世初頭頃に起こり、以後、白潟と末次の間には、堀尾氏（松江藩）が直接普請に関わるような「雲州第一の長橋（雲陽誌）」である大きな橋（大橋）が架けられ、橋は「大橋」と称されるようになった。その大きな出来事とは斐伊川東流ではないか、と推論した。また、根拠となる史料があるわけではないものの、「源助伝説」と「大橋家の家名伝承」は、初代大橋が堀尾氏（松江藩）によって架けられたことや、斐伊川東流によって引き起こされた橋普請の困難な状況を伝えたものではないか、と推論した。

一方、自然科学（地質学）的に斐伊川が流れの向きを東に変え、直接宍道湖に流れ込むようになったのはいつとされているのか？ 松江市史編集委員の高安克己先生は「一般には 1635 年（寛永 12）あるいは 1639 年（寛永 16）とされているが、これには異論もある。古文書や絵図などの解釈から、もっと古くから斐伊川は宍道湖に注いでいたという意見も根強い。しかし、SJ96 も含め宍道湖のどのコアでもこれほど顕著に現れる上記のような異変は 1 層準しかなく、堆積速度から見てもそれが 1630 年代に起こったとするのが妥当である。もちろん斐伊川は大きなファンデルタを作っているのだから、分流したいくつかが宍道湖に流れ込んでいた可能性は否定できないが、主流はやはりずっと西に向いていた、と考えた方がよさそうである。」（高安克己 2016 「斐伊川下流域の自然環境変遷史—斐川平野と宍道湖の生い立ち—」『河川』No.843、日本河川協会）と、されていた。1630 年代は、松江藩では堀尾氏（～寛永 10 年〔1633〕）、京極氏（寛永 11～14 年〔1637～1634〕）、松平氏（寛永 15 年〔1638〕～）と、藩主家が目まぐるしく変わる時期にあたる。

そこで、高安先生に直接、斐伊川東流は 1630 年代よりもう少し早い時期に起きたとは考え

られないか尋ねてみた。すると、「大橋川の水量については斐伊川東流以後増加したことは確実に、宍道湖に流れ込む淡水量が約3倍になり、塩分が急に薄くなり、流入土砂量も急増したことが分かっている。しかし、その年代となるとデータが少なく、『斐伊川史』（長瀬定市編 1950）にあるように、一般的に言われていた寛永12年、寛永16年など1630年代に起こったと考えてもよいと認識している。今のところ斐伊川東流の時期は正確には分からないが、近く島根大学で宍道湖のコアボーリング調査を行う。今なら、かなり詳しく年代測定が可能なので、正確な時期が分かるかもしれない」とのご返答であった。同時に、科学的に斐伊川東流時期を明らかにしていくことと、史料分析を深めることで、松江の歴史を明らかにしていくことは大切なことだと励ましていただいた。

「大橋」の名称起源を斐伊川東流に求めることは、現時点では突拍子もないお話で、推論（空想とでも呼ぶべきか）の域を出るものではない。それでも、近く島根大学で行われる宍道湖のコアボーリング調査の結果を心待ちにしておきたい。

追記 「大橋川」の名称由来を整理するうち、川名の由来となった「大橋」についても名称由来を探ろうと無謀にも試みました。松江の歴史をよく知る識者何名かに、「大橋の名称由来は？」と質問すると、一様に「ん?!」と、げげんそうな顔をされました。大橋は大橋であって、“大きな橋だから”“堀尾氏が城下町建設時に大きな橋を作ったから?”という返答はできても、“なぜ近世になると白潟と末次とをつなぐ橋は「大橋」と呼ぶようになったのか”、“なぜ「雲州第一の長橋（雲陽誌）」を必要とするようになったのか”という疑問自体、これまで松江では考えられたこともなかったテーマだったのかもしれませんが。ふるさとの歴史探求の面白さは、気づいてみれば、いろいろとありそうです。

さて、1980年代頃から、汽水域研究の優れた業績が徳岡隆夫先生、高安克巳先生らを中心に次々と発表され、同時に斐伊川東流前後の宍道湖の状況についても自然科学的な分析が重ねられました。この過程で、斐伊川東流の時期については、「1635あるいは1639：出雲大洪水、それまで西流していた斐伊川が東流し、淡水湖としての宍道湖が誕生した」（徳岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・三梨昂1990「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』第36号）という理解が固定化していきます。この度、高安先生に直接聞いたところ、自然科学的な分析結果には時期幅があるので、1630年代という絞られた時期説明の根拠は諸誌で広く用いられる長瀬定市編1950『斐伊川史』などであったことが分かりました。一方で、『松江市史』「絵図・地図」にも掲載された「出雲国図」（東京大学総合図書館蔵（南葵文庫））は寛永10年（1633）幕府収納絵図の写しとされ、この絵図では斐伊川は既に東流して描かれていますので、描写と作成年が正しければ、斐伊川東流は寛永10年以前の出来事であったと思われる。

近年の研究では（大矢幸雄・渡辺理絵2018「近世初期における松江城下町の空間的特性」『松

江市歴史叢書11』)、計画図というより、実態に基づいて描かれたとされる「堀尾期松江城下町絵図」(島根大学附属図書館蔵)が、斐伊川東流の前に描かれたものなのか後に描かれたものなのか、ささやかな関心もわいてきました。斐伊川東流時期が定説通り、寛永12年(1635)あるいは寛永16年(1639)だとすると、寛永5~10年(1628~1633)とされる「堀尾期松江城下町絵図」は、斐伊川東流前の松江城下町と現在の大橋川筋、天神川筋を描いた貴重な絵図として理解することができますし、正保年間(1644~1648)の「出雲国松江城絵図」(国立公文書館蔵)は斐伊川東流後の松江城下町と現在の大橋川筋、天神川筋を描いた最初の絵図として理解することとなります。

関係の皆様方のお知恵を拝借しながら、文献や絵図などに記された斐伊川東流について、もう一度整理が必要だと思っています。

本コラムは、「大橋」の名称由来について推論を試みたものです。松江市民が愛してやまない「大橋」、また、定説のように語られている斐伊川東流時期に関わる推論なので、強いご叱正を覚悟で識者の御教示を仰ぐ次第です。本校執筆にあたり、永島真吾氏、常盤貴之氏、内田文恵氏、高安克己氏、大矢幸雄氏、西尾克己氏、岡崎雄二郎氏、徳岡隆夫氏、入月敏明氏、古川寛子氏のご教示をいただきました。感謝申し上げます。

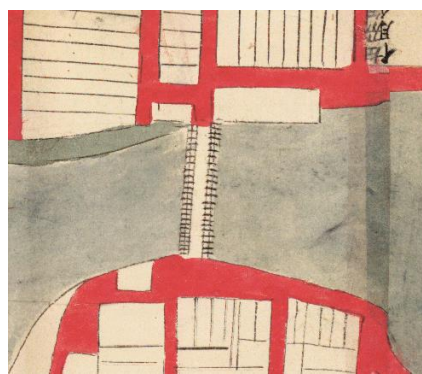
(歴史まちづくり部次長／稲田信／平成31年4月1日記)



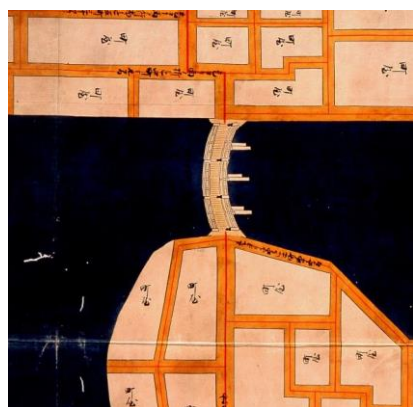
「出雲国図」部分（寛永10年（1633）東京大学総合図書館蔵（南葵文庫））



「堀尾期松江城下町絵図」に描かれた「大橋」（島根大学附属図書館蔵）



「寛永年間松江城家敷町之図」に描かれた「大橋」（丸亀市立資料館蔵）



「出雲国松江城絵図」に描かれた「大橋」（国立公文書館蔵）

堀尾期（堀尾忠晴）、京極期（京極忠高）、松平期（松平直政）の絵図に描かれた「大橋」

寛永10年（1633）とされる「出雲国図」（東京大学総合図書館蔵）では、既に斐伊川は全ての流路が東流して描かれている。また、寛永5～10年（1628～1633）とされる「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）では、「大橋」らしき橋が描かれ、橋の下には、正保年間（1644～1648）の「出雲国松江城絵図」（国立公文書館蔵）と変わらないほどの水流が描かれているようにも見える。